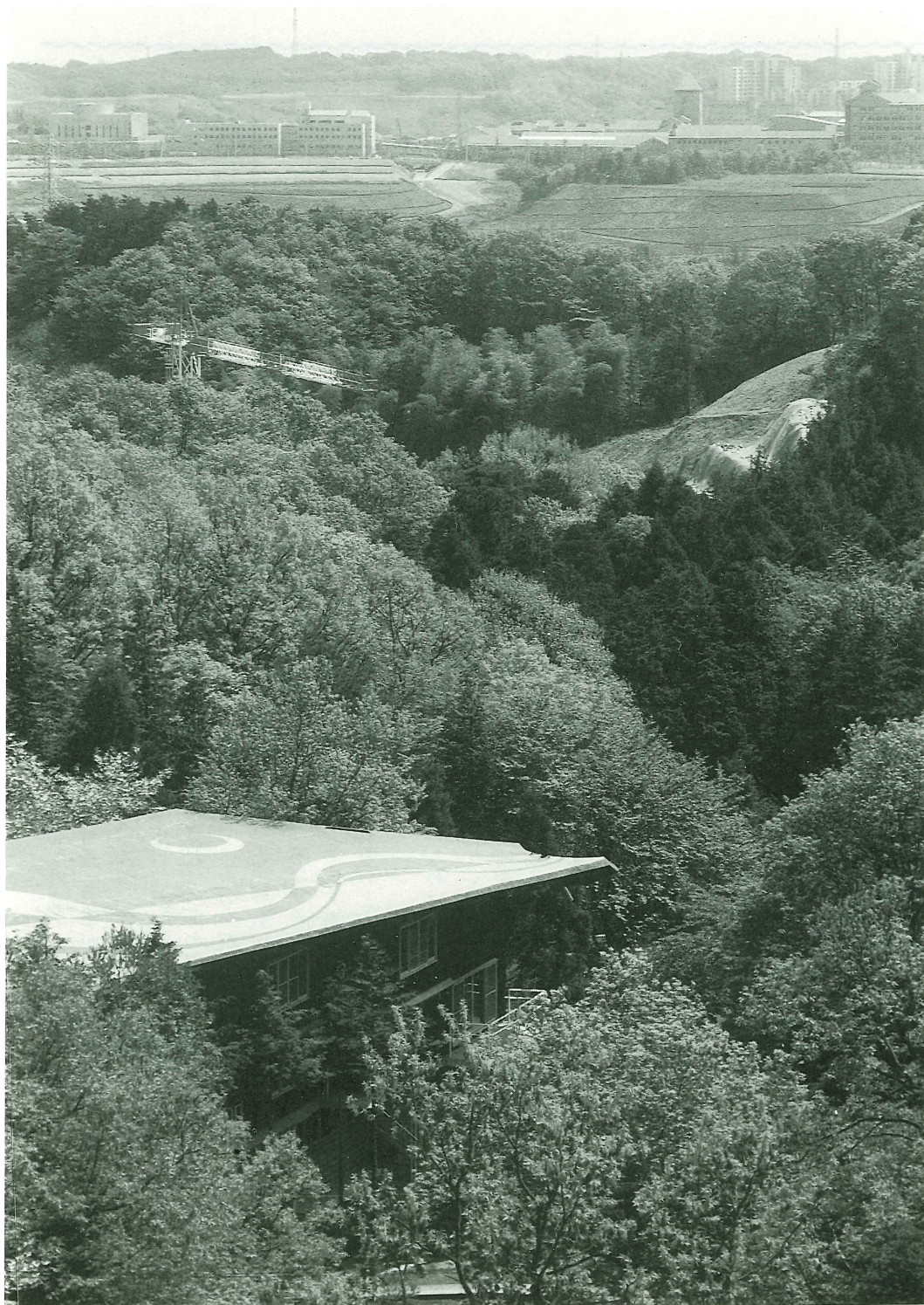
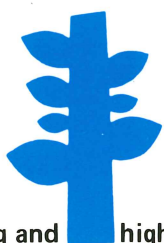


SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス'91夏



- 座談会 よりよい大学教育の方法を求めて
- 平成2年度 教育プログラム白書／業務白書
- 業務通信 花と新緑の丘の合宿研修——新生オリエンテーション合宿を中心に——



Plain living and high thinking

No.123

よりよい大学教育の方法を求めて

学習意欲を引き出す

坂井(司会) 今日は第2回のFDプログラム(第27回大学教員懇談会、一九九〇年九月二九―三〇日実施)を受け、大学教授法に関する具体的問題について、運営委員、ファシリテーター及びFDプログラム小委員の方々に集まっていたいで、さらに理解と認識を深めようと思います。

私たち教師の生の声を議論に反映させよう、そういうふうな話を始めようとする、どうも近頃の学生は出来が悪いとか、勉強する気がないという話が出ます。その点について活発に議論された中西先生のグループの議論を紹介していただきたいと思えます。

中西 学生が何を望んでいるかよくわからないとか、積極的に勉強に取り組む意欲がないのじゃないかということが、教える際の一歩のとまどいの原因だということがあります。これについて私のAグループでは、学生はそれなりにある意味では満足している。しかし、それは本当に満足しているのか、それとも諦めているのが問題だという意見がありました。むしろ全体的には消極的評価のほうが強く、それは入試のあり方などが関連しているんじゃないかということでした。

司会 どうすれば学生に積極的な学習意欲を持たせることができるか、その辺が一番の問題ですね。ところで、最初のシンポジウムで山内先生が、学生には学生の固有の論理がある。それと教師の論理がかみ合わないんじゃないかというお話をされていましたが、そう

いう教師の関心と学生の関心のすれ違い、そういうものを山内先生はどうお考えですか。

山内 例えば今の学生は何を望んでいるのかという、この発想がすでに学生に伝わりにくい。そうでなくて、学生から見れば、その先生が何を我々に与えようとしているのかが見えてないんですね。そもそも、そこがすれ違っているんじゃないかという気がするんです。教師が常に何か真正面からとらえ過ぎるというところがあるのかもしれないと思います。

僕も学生の論理がわかっているわけじゃありません。学生の論理がわかっているれば全然悩むことはないわけです。例えば受験勉強の中で常に正しい答えを求めてきて、大学に入つて来ますね。大学では先生は必ずしも答えは一つじゃないんだよとおっしゃるわけです。あるいは物事は真正面からだけじゃなくて、斜めや横からも見なきゃいけないんだよというようなことをおっしゃる。じゃあ、斜めから見たらどうなるのかとか、横から見たらどうなるのかということを実際に授業で実践しているかが問題なわけですね。

それに関連して言うと、われわれが学生のころもそうでしたけれど、先生は専門的な知識は深いんだが、学生が持っているような教養と言いますか、そのレベルで広く、浅い教養に欠けているんじゃないかと思う。例えばテレビの番組を見ると、くだらない番組だと即断する。そうではなくて、それを学問的な関心、あるいは知的な好奇心にまで引き寄せ、努力を教師の側がやらなければいけない。そういう意味で、学生と共有できる言語と

いいですか、そういうものを教師の方が見出さないといけないんじゃないかというような感じがしているんです。

蠟山 二〇年前に私が大学で授業を始めたころは、大学紛争の直後だったんですけど、学生と教師のコミュニケーションの断絶ということがものすごく自分の意識にあったんですね。ですから、学生と自分は年齢は非常に違うわけですけども、ある部分についてはかなり共通の関心事を持っているんだよということを示さなければいけないと思って、僕は何をやったかと言うと、これは自分が勝手に好きで聞いてたからなんですけど、FMの深夜放送を聞きまして、歌手の名前とかヒットチャートの何ととか、多少こっちはお前たちと同じようなことを知っているんだよということを示すと顔色が変わる、そういうところがありましたね。

原科 教師も学生に近づく必要があるけれど、学生の方もやはり教師に近づく必要があると思います。大学が何を求めているかということ、学生自身が積極的に知ろうとして努力しているか疑問です。その辺がこれまでの教育の欠陥かもしれないわけですけれども、あまり明確に意識を持っていない学生が多いですよ。やっぱり一八歳で高校を卒業してすぐ入学するというシステム自体が本当は問題なのであって、一度外へ出て行って社会のことは知って、新しい問題意識が出てきたら大学にまた来る人がふえれば変わると思うんですけど。

アメリカの大学ですと、かなり年齢の上の人も入って来ますね。私の専門分野は社会工

出席者 (発言順)

〈司会〉	坂井 昭宏	北海道大学文学部助教授 (哲学)	安岡 高志	東海大学理学部教授 (環境化学)
	中西 又三	中央大学法学部教授 (行政法)	原科 幸彦	東京工業大学工学部助教授 (社会工学)
	蠟山 道雄	上智大学外国語学部教授 (国際政治学)	越前 喜六	上智大学文学部教授 (宗教学)
	山内 正平	千葉大学教養部助教授 (ドイツ文学)	示村悦二郎	早稲田大学理工学部教授 (制御工学)

この座談会は、第27回大学教員懇談会 (主題: よりよい大学教育の方法を求めて、期日: 1990年9月29~30日) での議論を踏まえ、大学教授法の具体的な問題点を掘り下げるために、昨年10月22日、関係者11名が出席して行

なわれました。その全容は『大学教員研修マニュアル2』 (FDプログラム小委員会編、大学セミナー・ハウス発行、1991年3月25日) に収められていますが、その中から一部を抜粋してご紹介します——編集者

学で、都市問題とか環境問題に関連してまずから社会のことを考えるわけです。そうすると一八歳ぐらいで社会の問題を考えろといっても彼らの経験は限られていますので、考えることはかなり限られていますね。それがアメリカですと、都市計画分野の学生は、結構実際に外で仕事をやって、そこから新しい問題意識が芽生えてから、三〇、四〇になってまた大学へ入って来ます。ですから、いろんな年齢層の人が来てるでしょう。そうすると、それは学生相互に問題意識を植えつけ合うところがあるんですね。

もっといろんな年齢層の人が入れるようになり、いろんな形の学生が入れば、学生も教師が何を与えようとしているか、あるいはこの大学は何を我々に提供してくれるかということが理解できると思うんですね。

司会 教師と学生という観点に絞ってみると、広い意味で、学生ともっと問題や関心を共有し、教師が少し学生の方に近づいて、学生を教師の方に引っ張り込まなければいけない。そこでもう一度山内先生にお伺いしたいのは、学生の授業評価、いわゆる裏ガイダンスですけど、その中にある学生の論理から見た、学生にとっていい授業、悪い授業というのはどういうところに基準を置いているとお考えになりますか。

大切な導入のきっかけ

山内 例えば九〇分話すのに九〇分だから話してほしくない。先生の方は授業をきっちり始めて、きっちり終わることが当然だと思っ

れない。だからその間に例えば一〇分休憩があるとか違うとくるといふことがありま

す。話の上手な先生の場合だと結構九〇分もつわけですね。そうでない人たちはもたない。そうすると、我々はもちろん芸人になるわけじゃないんですけども、やっぱり話術を学ばないといけない。どういう導入にするか、学問的な関心をどういうふう

に学生たちにもたせるか、そのきっかけをどう作るかですね。そこ

のところがすごく重要で、話し方だとか、板書の仕方だとか、そういういたものと同様に我々が学習しないと

いけないことなんじゃないかという気がするんですね。

学生たちは欠席は何回までいいとか、試験はどうかとか、甘いとか、辛いとか、あの先生はよく怒るとか何とか言いますけれども、やっぱり授業に出るからには何か得たいわけですね。その何か得たいと思っ

ているものを、我々が提供しないと

いけないと思うんです。桂文珍氏の本『日本の大学』の中には、例えば自由ということ

を教えるときに、彼は新幹線の自由席を学生たちにまず思い起こさせる。そういうき

っかけの作り方、そういう気持を我々も学ばないといけないという気がするんです。もちろん、それぞれの人のやり方があるわけ

とを訓練することが大切だと思えます。そして、学生たちの発想を実現するためにはこの理論を理解することが必要であるというふうに。

原科 学生が興味を持つために、今おっしゃったことは教室に行かなければ得られないものということですね。例えばビデオで教材ができていて、それを提供すればいいというのもあり得ますよね。だけどビデオを見たものというのは、その時期、例えば今日というようなのは、そのタイミングで起こっている問題を含むことはできない。授業にこういう個別的なトピックを織りませるといようなことがあると、それは、おっしゃったように教室に限るわけですね。例えば今朝、新聞に出てた、昨日起こった、そういうことが織り込まれているからですね。

今日の問題と引き合わせてものを考えるということ。その背景には、もっと蓄積のある理論的な議論もあるわけです。そういうものに今現在の問題を新しく見させるといふか、そういうような工夫を常にやらないといけないと思うんです。

蠍山 今言われたことを僕の専門分野で言いますと、私は国際政治学を教えているわけですけども、最低限学生に頼むことは新聞をもうちょっと読んでもらいたい。一面と二面と七面ぐらいは読んでもらいたい。近ごろは世界中大変動ですから、記事にあふれているんですね。そうすると、今起こっている出来事と私

が話していることが無関係ではあり得ないんだけど、工夫しないとその関連性は学生にわからないことが多分あると思うんですね。抽象レベルで話をしていますから。しかし、時事解説に力を入れちゃいますと、体系的な知識を与えることができなくなってしまうんです。その妥協点というのが非常に難しいわけですね、時間の配分が。

ですから、導入の部分で、昨日の夕刊なり今日の朝刊に出ているこういう出来事というのは、今我々が講義でやっているこういうことと関係があるんだということとをヒントを与えながら、その抽象的な議論の方へ入っていくということをやっているんです。そうしますと、比較的、今日は何を言うかなというのを期待してくるような気がするんです。

教師のパーソナリティーが大切

司会 良い授業、悪い授業という問題に関して越前先生に伺った話ですが、教師のパーソナリティーがよい授業に非常に重要な要素になると。それと授業計画が大きな要素になってきていると思うんです。

学部教育の目的がどこにあるのかについて、非常に混乱した状態にあると思うんです。具体的に言えば、その講義の具体的な教育目標として、基本的な考え方を教えることに力点を置く場合と、体系的な専門知識を教えることとの二つがあると思うんです。知識をきちんと教える

ためには、がりがりやらなきゃいけないし、考え方を教えようとする、知識としてはもの足りないという結果になってしまいます。そういうところを、個々の授業の場では、どう工夫しているかという点でお話をしていたかと思いますが。

越前 教師の側としては、ある専門研究者ですから、しかも教科が定まっていますから、こういう内容を教えなければならぬという、責任を強く感じるわけですね。しかし、それが時々空回りしてしまっています。けれども、社会はどんどん変わっていきまますし、しかも時代の子である若者の意識はどんどん違ってきて、多様化してきている。そうした学生の意識に対応できないのではないのでしょうか。とにかくわかりやすく面白く話せばいいと思うんですが。学生に限らず、我々先生でも、面白い話でしたら集中して聞きますからね。それから聞いて何か得たと思うような知識でしたら何かうれしくなるのではないのでしょうか。しかしそうでないと、やっぱり心が動かされないとということになりますね。我慢して出席するというのも、それは修行のうちになりますけど(笑)。今の大量化時代に学生に修行を求めても無理だと思いませんか。

授業では九〇分とか集中力を持続させなければならぬでしょう。でも、先生がどうしても教えたいことは三〇分ぐらいでまとめて言えると思うんです。

あとの六〇分はどうしたらよいかというと、先生方はご自分の人生体験をお話しになったらいいと思うんですね。例えば、君たちが今ここで勉強するのは社会にどう役に立つのか、全然役に立たないかも知れないけれど、「無用の用」という役に立つんだとかね。私の場合は、学生のときこういう専攻だったと。例えば国際関係を専攻したけど、全然国際政治に役に立たないとか(笑)。でも、そういうことがふつと先生の口から出ると、まじめで固い講義から急にそういう話が出る、学生はホッとしますよね。やはり緩急でしょう。桂文珍さんほどまく話するのは難しいですけど、学生の様子を見て、顔を見て、緩急自在でなくてはなりません。

私は一般に今の学生は抽象的な知識を求めていないと思います。その知識が自分の生き方になんか関係があるのかを考えていると思うんですね。私は「人間学」なものですから、そして、生き方を取り上げるからおさらそうかもしれないかもしれませんけれど、まあ何でも話すわけですね。しかし、先生によっては、例えば自由を自由論として話すのか、文珍さんのように自由席を例に話し出すのか、その辺のアプローチというのは、違いますね。自由という問題を自由論として考える先生というのは、哲学を理論としてだけ学んできた人でしょう(笑)。

しかし、そういうことには今の学生は全然興味を持たないと思うんです。恐ら

く大学の先生も、自由論なんて興味ないと思うんですよ。ですけど、自分は自由でないと感じていることが多々あると思うんです。例えば煙草ばかり吸ってやめられないというのは不自由でしょう(笑)。アルコールから解放されたいと思うけれども、できないとか。つまり、人間は自由な存在じゃないわけです。ですから理念的に自由とは何かと、それはもちろん一〇分ぐらいで説明できますからね。講義の一時間というのは学生と教師が、教師が学生の顔を見て、反応を見て、やはりダイナミックにボールを投げ合っているような感じの、そういうことができたならば理想じゃないかと思うんです。学生も疲れたと感じたら、たまには早く終わることも教育でしょう。

「知識」と「考え方」

示村 私が教えていることは、数学と同じようなことです。つまり、時事問題とは結びつかないし(笑)、そういう意味では話の導入というのはなかなか難しいですけど、私はこういうふうに見えるんです。つまり、やはりある知識は教えないければならない。ところが、その知識というのは、昔から大勢の人が苦労していろんなことを考えてきて、抽象化してうまく定理の格好にまとめたものになっている。それをボンと学生に教えて、この定理はこういうふうにして出来上がっている、つまり証明ですね、また使うときはこうだよと。そういう演繹的な話をしたんじ

や全然学生は興味を持たないんです。そこで私は、どうやってそこへたどりついたのかという、その帰納的なプロセス、そこに重点を置くのです。いまおっしゃったことも同じだと思いますが、つまり歴史的な視点を加える。先人たちはどんな苦労をしてそこへたどりついたかという過程です。そういう意味では、私がそういう先人になりかわって学生の前で追体験をしてみせる。

原科 そうなりますと、この前我々のグループでも議論になったんですが、そういうことができる教官は限られてきます。どうも若手の教官では難しいと。極端な意見が、定年数年前の教授でないのだめだ(笑)。実際それぐらいの経験がなければね。

先ほど知識を与えるという話が出てきましたが、知識を与える場合に講義のただけで知識を与えるのは実際は時間的に難しいですね。だから、むしろそれよりも学生をどうやって勉強に引き込むかということですよ。むしろその知識を獲得したくなるようにする。プロセスを教えるとか、いろいろおっしゃったことはそういうことじゃないですか。だから、ただ単に講義するということではない。課題を与える、宿題を与えるということも必要です。その知識を自分で習得するのにはそういうことを通じてしかできないのではないのでしょうか。

中西 IDEの『教師と学生』の学習過程の中に、まず理解させ、その次に思い

出させる、それから創造的に適用するという指摘があって、これはなるほどともだなと思いますけど、学生が主体的に参加するというのは、多人数を教えるくにはならないときには非常に難しいですね。それで、できるだけかみくだいて、今までわかっている言葉で話して、他とどういう関連があるとか、それをやっていくとどういうふうになるかとやりますと、学生はかえって難し過ぎてわからないうと言ってますね。それはやり方が悪いのだと思いますけど、何か考え方がこうだ、これを発展させたらこうなるから、ここが限界だとか、そういうことを授業の中で言うと、かえって学生の方はついていけない。むしろ、「これは決まったことなんだから覚えろ」というふうにやった方が学生としては安心して聞いていられるというような反応があるので、ね。そこをどうすればいいのかわからないままです。

出席をとると教師も緊張する

司会 話は授業の現場で実際に授業をどう組み立てるか、そっちの方に話が移っているわけなんですけれども、一つの話を出席の問題に移してみましよう。蠟山先生は出席はおとりにならない。

蠟山 とりません。

司会 どうしてとらないんですか。

蠟山 とつてみてもしようがないだろうと思うんですね。来たくない学生に、僕はお願いで聞いていただいているんじ

やないんだから。聞かない人は聞かなくていいよと。困るのは資料を作って配布するときに、どのぐらい作つたらいいかわからないことです。私は配るときに、まず一人一部に限る。休んでる友達のを分けて行っちゃいかんと。友達のために事務室まで取りに來いというふうにはよつと制限を加えると、出席することの意味というのがわりあい重要になってくるんですね。だから、全く出席はとらないけれども、時々そういう効果を生ずることはやるといふことですね。それに、前の年に作つたものは役に立たない。つまり毎年新しい要素を入れていきますから。それは自分の講義を改良しているという意味で毎年つくるもんですから。

示村 私も出席はとりません。ほとんど毎週のように宿題を出していますから、それを持つて来るのが出席をとることになっていきます。宿題を出さない週もありますが、それでも出した週と出さない週とでそう出席は変わらないから、多分宿題を持つてくるためだけに出席してるとはならないと思います。出席でしるだけではあまり意味がない。要はどうしたらきちんと常に勉強するようにさせられるかということだと思います。

越前 私は出席論者なんです。特に一般教養の場合はね。私が一般教育主事のと、全員の先生に出席をとるようにしてくださいとお願ひしました。出席は教育の一環ですからと言って。とらない先生もいますけど、でも、抜き打ち小テスト

とか、リアクションペーパーを書かせるとか、出席にかわるものをしてる先生方がいるので協力的だと思っんです。

うちの大学は、学園紛争の後、カリキュラムの自由化で、出席も自由になったんです。私はそのとき若かったもんで、から、来たい学生が来ればいい、私の話を聞きたけりゃ来ればいいなんてことでやりましたら、やはり見事に減りましたね(笑)。半分どころじゃないんですよ。

それでこれは教育じゃないと感じたので、それから出席を強制しました。出席を評価の対象にするとか、三分の二以上は出席しないと、減点するとか、そういうことを最初に宣言して出席を毎回とりません。そのために私自身は責任を感じているわけです。この学生たちに何か知的なおみやげを持って帰すぞとね。だから意気込んでるわけですが。だんだん年取ってききましたから、うまくいかないときもあります(笑)。だから、こちらも出席をいい加減にやるつもりならば、学生に対してもいい加減な対応をするけれども、出席をとる以上、やはり授業というのには真剣勝負みたいなものだと思うって準備します。君らは今はつまらん、つまらんと言っているけれども、とにかくおれは皆勤したんだと思えば、そういうことが将来すごい自信になるんだと。こんなつまらない授業を三六五日も聞いてきたんだから。そして何が人生で役に立つかわからんぞとか言ってますね(笑)。

それともう一つ、やはり人間の性は善

であると同時に悪でもあると思うんです。やはり怠けるのは、人間の常ですね。私が神学校に入っているときに、二つのコースがありました。出席コースと自分で学習するコース。自習するコースは出席しなくてもいいんです。私は自習コースに入ったんです、二年間だけ。しかし結局勉強しなかったんです。ほかのことを勉強したもんで、試験のときどれほどいいじめられたかわからないですよ。その上、評価も悪かったんです。出席した連中はみんな合格するわけです。そういう経験からじゃないんですけれど、やっぱり出席してると、どんな先生からでも何か学ぶのではないですか(笑)。

学生を授業に参加させる

司会 学生をどう授業に参加させるかという、そういう工夫のケースを紹介してもらいましょうか。

越前 少人数とか、少なくとも二〇人、多くて二五人ぐらいのゼミでしたら、まず大体発表させますでしょう。課題をいくつか出して本人に選ばせる。それから文献を紹介して、いつか発表するということになるから、どうしても授業に参加するんじゃないでしょうか。グループ・ディスカッションというのもやりますけれども、昔の連中は本当にグループ・ディスカッションをよくやりましたね。例えば七人のグループで、愛なら愛について議論をしますと、みんながよく発言し

ました。それを誰か一人がまとめて発表したもの。今は何か非常に小ざらくなってしまっていて、発表者に「君、まとめてくれや」とか何とか言って任せてしまっているんです。あとはみんなで雑談しているんですよ(笑)。

そういう若者意識の変化にどう対応していくかですね。だから、グループ・ディスカッションよりも、むしろ私は個人個人みんな発表させるんです。五分でもいいから何かまとまったことを言うんだと。その方がやはり積極的になりますね。まあ宿題と同じようなものですね。やらなければならぬと思ったらやるでしょうね。

私はそれよりも何かいい方法というのが今のところ見つからないですね。やっぱり受け身人間じゃないですか、今の学生は。

示村 私はほとんど毎週宿題を出すと言いましたけれども、それは復習と予習と両方の意味を持たせているんです。ところが、レポートの半分ぐらいがオリジナリティで、あとは写したのではないかと思われるんです。そこで、私はレポートは授業の始まる前に教卓へ乗せておかせて、それを授業中にランダムに抜きだして当てるんです。レポートに書いてきた内容に限らず、講義に関連しているような質問をするんです。これは、授業に参加させる意味と、中には友達に頼んでレポートを出してもらおう、いわば不在投票を叱る

意味があります。不在投票が見つかると見せしめに、パフォーマンスとして、ものすごく怒ったような顔をして注意するんです(笑)。レポートについては、可能な限りコメントをつけて翌週返します。前期の間は主としてレポートの書き方を注意します。小学校以来、論理的文章を書く訓練を余り受けていませんから、最初は大変です。

蠟山 だから、四年になっても卒論の書き方がわからない。最初から順番に書くところから書いてみなさいと。それを持つてくれば批評してあげるからと言うと、「あ、そんなことしていいんですか」と言うわけですよ。最初からきちんと書くべきなんだと思っ込んでるわけですよ。それは僕だつてできないよと言うと、安心して帰つたりするんです。そういう訓練が全くだきてないわけです。文章を書く、組織的に書く、その単なる技術ですけど、その技術を習ってないわけです。

山内 レポートの話が出てきましたけど、僕の場合、朱とコメントを入れて返し、必ずいくつかのレポートを印刷してレポート集として配布します。そうすると、学生たちは、ひよつとしたら自分のが外に出ちゃうかもしれないんだということ意識するんです。実際の効果はどうなるのかということを全然考えてなくて、ただ僕は学生の着眼点と言いますか、我々にはないものを学生たちは持つて

いますので、むしろ僕自身のためにも残しておきたい訳です。

そういう労力の積み重ねがあれば、それほど手間をかけなくてもいいんじゃないかと思えます。いちいち朱を入れて、ここはこうだ、あだだというふう個別に指導していかなくてもいいんじゃないかと思うんです。

求められる教師の意識と力量

山内 大学のレベルの差と言いますか、個別の大学の事情と言いますか、それで随分違うような気がしますね。全体的な印象としまして、セミナー・ハウスでもそうだったし、ここもそうですが、念頭においておられる学生の質はかなりいいんじゃないかという気がします。実際にドイツ語を教えていますと、この大学はドイツ語を勉強する以前の段階だなどというのがあるんですね。例えば、できるだけ英語を入れてやろうと思うわけですね。ですが中学レベルの英語がわかってないわけです。何のためにこの大学ではドイツ語を必修で勉強させるんだろうかと考えこんでしまいます。そのところが最大の問題ですね。だから、日本の大学を一般化しては語れない、なかなか難しい問題がありますね。

司会 だから、外国語の必修の科目というのは難しいと思えますね。

蠟山 僕のAグループで出た問題としては、語学の先生の中に、自分の本来教えた専門科目が教えられない、語学の教

師は自分の仮の姿なんだから、そこを評価されたくないという気持があるんですね。というのは、他に専門があるんだが与えられている仕事は言葉を教えることである。自分の本当の専門を評価してもらえないと。僕らは自分の専門で教えているわけです。そこで一生懸命勝負できているのですが、その人たちは、語学では勝負したくないというわけです。

示村 それと逆のことが専門の中でもあります。カリキュラムの中の基礎的なところは、もはや研究するレベルのものは余りないが、どうしても教えなくてはならないというのがあります。つまり、学問的にそれを専門にしている人はいないけど、誰かが教えないといけない。そのときに、専門でないのに、担当するのはけしからんという意見を言う人もいます。それは一面では正しいのですが、私は賛成じゃありません。そういう基礎的な学問は、たとえ専門的に研究していなくても、我々はプロだから教えられるべきではないんじゃないか。その教育に一生懸命取り組むことも、ものすごく大切な仕事だと思えます。

蠟山 そうですね、アメリカの大学の博士課程ですと、少なくとも社会科学で見ると隣接の科目の基礎の部分は一応マスターして、それを教えられるんじゃないかという考え方がありますね。しかし、日本の博士号ですと、そうではない。むしろ特化した専門の部分だけで評価する。だから隣はもう教えられない。

それでいいんだという考え方がある。そこから辺が問題なんじゃないかな。

原科 今の示村先生のお話、私も一応工学のはしくれでよくわかります。社会工学科でそういう科目をサービス科目と云ってるんですけど、それは誰でも教えられなきゃいけないということで、教官はその場合トレーニングされ、授業の担当を強制されます。ですから、我々はローテーションを組んでいます。つまり、数学的な基礎科目、これは統計学とか、そういうようなものですが、三人か四人の教官が回っていてね、一つの科目を三年くらいやって交代しているわけです。

安岡 私のところは化学なんですけれども、一般教養の化学は大体この範囲で教えるというふうに、専任教員が決めまして、それに対して各担当教員が学生に講義をするのと同じことを先生の前でやる勉強会を行っております。そして、そこがおいしい、あそこがおいしいというのをやってるんですけれども。

司会 教育も専門です。よく言われるんですけども、研究も専門だけど教育も専門というのは、二足のわらじというところが変だけれども、教育も専門であるという自覚をもたなければ、大学の教師はつとまりませんね。

原科 研究と教育の二本足で立ってる。越前 私はいつも山にたどって言うんですけど、高い山になるためには裾野が広がらなきゃならないと。専門というのは結局これだけをやらばいいというんじゃないですよ。「無用の用」ですよ、まさに。裾野というのは、専門分野からいって隣接であり、関連であり、みんなつながっているわけでしょう。だから、やはり広くやることによってまた深くもなる。深くやることによって広がって行くということがあるから、決して専門過ぎたから教養を教えられないということはないと思うんです。

蠟山 大学院で学生が集中するゼミというのがいくつかあるわけです。その一方でガラガラのゼミもある。では、ガラガラのところはどういう先生かということ、僕らが、この人はすごいと思って来てもらった若い専門家なんです。ではどこに集まるかということ、もう定年が近くにいる人が多いんですね。いい加減に教えるのかということ、そうじゃないんだと思うんですね。じゃなぜかということ、自分の考え方をどれだけ出せるかという問題。自分の専門分野でないものにも関連づけて学生の要望にこたえられるかどうかということなんじゃないかと思えます。

ところが、若い人たちというのは、自分が今やっつてること、そのもので勝負してしまうから、学生の興味はほとんど無視してしまう。どうもそこら辺が大きく影響しているんじゃないかと思えます。

(文責・編集者)

平成2年度
教育プログラム白書

平成2年度は、表1に示すとおり、全7回(前年度は8回)のプログラムを実施した。この紙面を借りて、各プログラムの指導教授・講師、並びに企画・運営に当たった共同セミナー委員会、国際プログラム委員会、大学教員懇談会企画委

表1 平成2年度教育プログラム開催状況

■大学共同セミナー

回数	期間	主 題	指 導 教 授	参加人員
No.152 (1)	平成2年 6月15～17日 (2泊3日)	ソ連・東欧の変貌	木戸 蕪、島田雅彦、加藤雅彦、 下斗米伸夫、伊東孝之、秋野 豊、 南塚信吾、直野 敦、柴 宜弘 (川端香男里)	102名 (25校)
No.153 (2)	11月9～10日 (1泊2日)	日本人は「豊かな社会」を 作れるか	井原哲夫、菅原眞理子、*竹内 啓、 *袖井孝子、*室田 武	62名 (23校)
No.154 (3)	11月30～ 12月2日 (2泊3日)	心の深層をさぐる —ユング心理学とグループ・ ワーク	*小川捷之、弘中正美、三木アヤ、 横山 剛、横山恭子、*岸 良範、 辻 祥子、藤見幸男、 ホーナー・デニス、国永史子、 讃岐真佐子	138名 (35校)

■大学院共同セミナー

No.10	平成2年 12月14～16日 (2泊3日)	現代戦後史の構造 —地殻変動する世界の原点を 問う—	石川真澄、*進藤栄一、油井大三郎、 三和良一、古関彰一、林 忠行、 和田春樹	32名 (11校)
-------	-----------------------------	----------------------------------	--	--------------

■大学教員懇談会

No.27	平成2年 9月29～30日 (1泊2日)	よりよい大学教育の方法を 求めて FDプログラムの実践(2)	喜多村和之、中田良平、鈴木正男、 蠟山道雄、中西又三、越前喜六、 安岡高志、絹川正吉、坂井昭宏、 示村悦二郎、(原科幸彦)、 (福田一郎)、(中島利誠)、(山内正平)	63名 (27校)
-------	----------------------------	--------------------------------------	---	--------------

■国際学生セミナー

No.17	平成2年 10月26～28日 (2泊3日)	地球時代の生き方を求めて —開発と環境—	佐藤大七郎、北島佳房、松井 謙、 桜井国俊、熊本一規、井手敏彦、 杉野二郎、河野栄次、*菊地 靖、 豊田由貴夫、下斗米伸夫、表 寿一、 (渡辺昭夫)、(高木誠一郎)、 (添谷芳秀)、(中西鈿治)、(田中稔久)	99名 (27校)
-------	-----------------------------	-------------------------	---	--------------

■国際フォーラム

No.7	平成3年 2月19～20日 (1泊2日)	アメリカの対中、対日政策	スーザン・シャーク、 フランシス・ローゼンブルース、 高木誠一郎、古城佳子、(宇佐美 滋)	13名 (8校)
------	----------------------------	--------------	---	-------------

*印は運営委員を兼ねた指導教授。()内は運営委員。

表2 平成2年度教育プログラム参加状況

(計5回、第152～154回大学共同セミナー、第10回大学院共同セミナー、第17回国際学生セミナー)

大 学 名	男	女	計	大 学 名	男	女	計
筑 埼	17	9	26	成 成	5	10	15
千 葉	1	2	3	聖 心 女	1	14	14
東 京	3	7	10	創 中	1	3	4
京 医 科 歯	1	1	2	津 田	11	2	13
東 京 外 国 語	3	5	8	帝 京	5	5	10
東 京 学 芸	4	1	5	東 京	2	1	3
東 京 工 業	1	1	2	京 女	2	9	11
お 茶 水 女	1	1	2	京 農	2	1	3
電 気 通 信	10	4	14	東 京	2	1	3
一 橋	1	6	7	東 京	2	0	2
横 浜	1	1	2	日 本	4	13	17
東 九	1	1	2	法 武	1	2	3
信 州	1	1	2	明 治	11	7	18
信 広	1	1	2	立 早	2	4	6
長 崎	1	1	2	早 稲	4	6	10
国立小計(17校)	80	48	128	独 協	15	17	32
東 京 都	2	2	4	京 国	6	8	14
横 浜 市	1	1	2	東 京	2	2	4
都 留 文 科	1	1	2	洋 英 和 女	3	3	6
京 都 立 科 学 技 術	1	1	2	ス タ ン フ ォ ー ド	1	1	2
公立小計(4校)	4	1	5	私立小計(31校)	109	167	276
淑 山 学 院	5	1	6	産 業 能 率		1	1
青 山 学 習 院	1	6	7	白 梅 学 園		1	1
学 杏 林	1	1	2	都 立 商 科		2	2
慶 応 義 塾	16	2	18	都 立 医 療 技 術		2	2
国 際 基 督 教	3	3	6	短期小計(4校)		6	6
駒 上	2	2	4	そ の 他	13	5	18
	8	23	31	総 合 計(56校)	206	227	433

総数433名のうち留学生は18名。

員会に改めて感謝の意を表したい。
本年度は大学共同セミナーを従来の4回から3回に減らし、大学共同セミナーの実施も見送ったが、前年度に他の企画にふりかえた大学院共同セミナーを復活させるとともに、六年ぶりで国際フォーラムを開催した。中でも大学教員懇談会は前年度につづいてFD(ファカルティ・デイベロップメントの略)プログラ

ムを実施し、「大学教員研修マニュアル」を編集するなど、大学教員懇談会企画委員会の内部に設けたFDプログラム小委員会の活動が目立った。



表2は学生を対象としたプログラム計5回の参加状況である。参加者総数は四三三名で、うち留学生は一八名であった。前年度が計6回、四六〇名であったことを考えると、内容的には学生の関心を集めることに成功したと言えよう。

大学共同セミナー3回分について見ると、合計三〇二名、一回当りの平均は一〇〇名で、前年度の平均七六名を大幅に上回ったが、一〇〇名を記録したのは、昭和53年度以来のことである。
また、表は紙面の都合で割愛したが、専攻別では社会科学系が全体の四八%を占めて一番多く、次いで人文科学系四一%、自然科学系六%であった。学年別では多い順に、3年(三六%)、4年(二二%)、2年(一八%)、大学院(一一%)、1年(六%)であった。

●年間の宿泊利用者五万五、六一一人
平成27年度の宿泊利用者数は延べ五万五、六一一人（月平均四、六三四人）、グループ数は一、一四一（同九五）であった（表1）。対前年度比三、四三一人増で、年間利用者の数字としては開館以来の最多記録であった。なお、開館から本年度末まで（25年9ヵ月間）の宿泊利用者数は延べ一六万七、五三八人、グループ数は二万四、九三四となった。

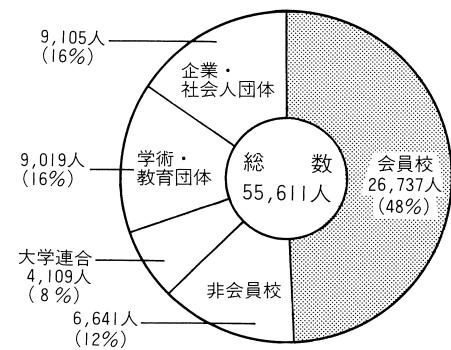
●グループ別の利用状況
宿泊延人数全体に占めるグループ別の

表1 利用者別宿泊人数・ゼミ回数

() 内は前年度

利用者	人数・回数	ゼミ回数	比率 (%)	宿泊延人数 (人)	比率 (%)	1団体平均人数
会員校	535 (532)		46.9	26,737(26,851)	48.1	34 (34)
非会員校	189 (180)		16.6	6,641(6,760)	11.9	27 (29)
大学連合	56 (46)		4.9	4,109(3,232)	7.4	38 (48)
学術・教育団体	145 (115)		12.7	9,019(7,345)	16.2	37 (47)
企業・社会人団体	216 (203)		18.9	9,105(7,991)	16.4	25 (23)
合計	1,141(1,076)		100	55,611(52,179)	100	32 (33)

図1 利用グループ別宿泊延人数



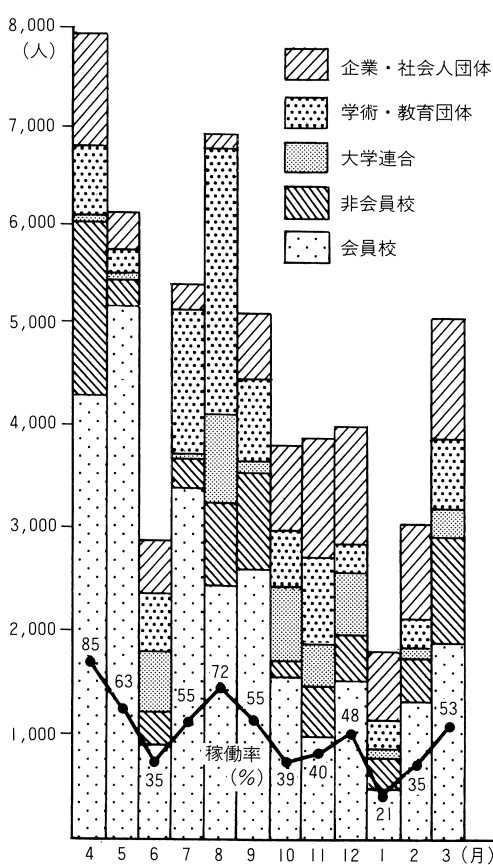
構成比率を示したのが図1である。「会員校」（本年度末現在、協力会員校・準協力会員校は計六六校）の利用は五三五グループ二万六、七三七人で前年度並みであったが、構成比率では四八％（前年度五二％）であった。「大学連合」には

⑨ 会員校の教師・学生が参加する集会が含まれているので、「会員校」の利用率は実質的にはこれより高い。しかし、「非会員校」を加えての「学生」グループ全体の構成比率は、ここ数年

表2 協力会員校最多利用10校

順位	大学名	ゼミ回数	順位	大学名	宿泊延人数
1	中央大学	54	1	中央大学	3,204
2	早稲田大学	40	2	早稲田大学	1,880
3	東京都立大学	34	3	東京学芸大学	1,099
4	東京大学	29	4	東京薬科立教	1,035
5	東海大学	21	5	東京立教	888
6	立教大学	21	6	立教東京	831
7	立教大学	20	7	立教東京	831
8	理学院	20	8	慶応義塾	823
9	法政大学	19	9	慶応義塾	743
10	明治学院	15	10	明茶の水女子	629

図2 月別・利用者別宿泊延人数と稼働率



七〇％前後（本年度は六七％）の横ばい状態で、傾向としては漸減である。
 ●年間の稼働率
 年間の稼働日数は、6月の施設整備期間（四日間）と年末年始の休館日（八日）

間）を差し引いた三五三日。稼働定員はこれに三一〇人（前年度「記念館」新設で四〇人増）を乗じた一〇万九、四三〇人である。これにより本年度の宿舍の平均稼働率は五〇・八％（前年度四九・二％）であった。ちなみに過去の最高は昭和55年度の五八％で、現在の稼働定員をもって同率の稼働を達成するには年間六万三、四七〇人を要する。
 月別の利用状況及び稼働率をみると、図2に示すとおり学年末試験をひかえた1月をはじめ概して冬季の利用率が低い。一方、本年度は、ユニット・ハウスの暖房配管の老朽化が進む中で、厳寒期は同宿舍の使用を可能な限りひかえる方向での利用者受け入れが行なわれた。しかし、ユニット・ハウスは全宿舍の六五％を占めているので、冬季閑散期の利用率を高めるためにも、このことは当施設にとって緊急かつ最重要の課題である。

第76回理事会・第56回評議員会

91年4月1日/学士会館

〔出席者〕

(理事) 中川秀恭、岡宏子、三宅彰、鈴木皇、小岩健介

(評議員) 川原栄峰、竹内正幸、朝倉孝吉、黒田瑛

委任状による者(理事一三名、評議員六六名(敬称略・順不同))

理事会・評議員会は、中川理事長が議長となり、議事が進められた。小岩専務理事から各議案について逐次、提案説明があり、それぞれ質疑が交わされ、審議の結果それぞれ可決承認された。

▽評議員人事に関する件

会員校の学長交替に伴い、早稲田大学総長小山宙丸、東京理科大学長西川哲治、中央大学長高木友之助、東京工芸大学長田中栄の各氏の新任。西原春夫、川添利幸、菊地真一の各氏の退任。なお東京理科大学の前学長吉識雅夫氏は学識経験者として学長就任前からの評議員であったためそのまま留任し、また小川芳男東京外国語大学名誉教授は昨夏逝去されたことに伴い退任となった。

▽役員人事に関する件

会員校の学長交替に伴う理事・監事の交替人事として、小山宙丸早稲田大学総長の理事就任、西原春夫氏の退任。高木

友之助中央大学学長の監事就任、川添利幸氏の退任。

▽平成3年度事業計画案及び収支予算案に関する件

収支予算については別掲の通りである。開館26年目に入り、早急に対策を計らねばならない課題が山積しているが、本年度については前年度までに築き上げた実績をベースにして着実な前進をはかることとして、予算規模も漸増に押えて実力培養の年度とすべく立案、編成した。なおベトナムマイクの確保、老朽施設の重点的改善補修については前年度に引続き実施する。また食事の改善については前年度において設置された食堂小委員会ですべての話し合いが行なわれ、食事内容の面で改善されつつあるが、本年度予算においては食堂改善費を新たに計上し、一層の充実を図る。更には初めて当ハウスを利用する学生諸君達のためにオリエンテーション資料としてのビデオ作成等のキメの細かい作業を進める。

平成3年度一般会計収支予算書

(平成3年4月1日より平成4年3月31日まで)

(単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
基本財産運用収入	127,000	人件費	110,320,000
会員校会費収入	59,400,000	施設管理費	52,693,000
事業収入	188,958,000	その他の管理費	31,225,000
施設改修協力金	10,540,000	一般事業費	21,901,000
セミナー会費収入	3,589,000	普通セミナー事業費	43,357,000
補助金等収入	8,411,000	学生指導セミナー事業費	10,070,000
寄付金収入	300,000	国際セミナー事業費	3,950,000
雑収入	6,320,000	固定資産取得支出	39,500,000
繰入金	6,110,000	予備費	3,000,000
当期収入合計(A)	283,755,000	当期支出合計(C)	316,016,000
前期繰越収支差額	39,122,000	当期収支差額(A)-(C)	△32,261,000
収入合計(B)	322,877,000	次期繰越収支差額(B)-(C)	6,861,000

平成2年度一般会計収支決算書

(平成2年4月1日より平成3年3月31日まで)

(単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
基本財産運用収入	123,187	人件費	111,221,166
会員校会費収入	58,800,000	施設管理費	57,242,749
事業収入	194,570,260	その他の管理費	30,345,253
施設改修協力金	10,368,615	一般事業費	20,714,477
セミナー会費収入	4,498,380	普通セミナー事業費	34,625,200
補助金等収入	7,962,000	学生指導セミナー事業費	11,232,242
寄付金収入	293,400	国際セミナー事業費	3,621,773
雑収入	9,858,637	固定資産取得支出	12,087,000
繰入金	9,665,015	繰入金	3,467,380
当期収入合計(A)	296,139,494	当期支出合計(C)	284,557,240
前期繰越収支差額	29,561,994	当期収支差額(A)-(C)	11,582,254
収入合計(B)	325,701,488	次期繰越収支差額(B)-(C)	41,144,248

第77回理事会・第57回評議員会

91年5月31日/学士会館

〔出席者〕

(理事) 中川秀恭、岡宏子、鈴木皇、天城勲、佐野博敏、小岩健介

(評議員) 川原栄峰、小谷正雄、伏見康治、加納六郎、板垣興一、阪上信次

委任状による出席者(理事一六名、評議員七五名(敬称略・順不同))

◇

理事会・評議員会は、中川理事長が議長となり、議事が進められた。小岩専務理事から各議案について逐次、提案説明

があり、それぞれ質疑が交わされ、審議の結果いずれも、可決承認された。

▽評議員人事に関する件

会員校における学長等の交替に伴い、芝浦工業大学大本修学長と東京薬科大学山川民夫学長の両氏の就任。日本大学梶原長雄教授の同大学常務理事就任に伴う評議員就任。柳井久義、京崎利夫、中山政夫各氏の退任。

▽常務理事人事に関する件

早稲田大学総長小山宙丸理事の常務理事就任。これにより、多年に亘り懸案であった同大学からの常務理事就任が実現した。

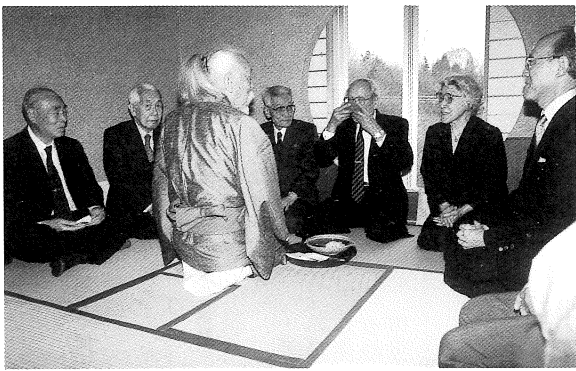
▽平成2年度事業報告(案)及び決算報

顧問会に励まされるの記

館長 岡 宏子

本館前の枝垂桜満開の四月十一日、セミナー・ハウスにとつては十余年ぶりという顧問会が開催された。開設以来四半世紀を経て、次のステップを踏み出そうとしている今、嘗て理事長、館長等を経験された顧問の諸先生方から御知恵を拝借し、新たな歩みへの御示唆と今後の活動のソフト・ハード両面への御協力も仰ぎたいというのが開催の主旨である。

先生方の御仕事の御都合を考え、季節的にも気持ちよくお出まし頂けるよう準備を整え設定したこの日、御参集下さったのは増田四郎、村井資長、加藤六美、川喜田愛郎の諸先生。御体調の関係で石館



茶の湯の「形」について話をしながら、お点前を披露される加藤六美先生(記念館・瞑想室兼茶室)

守三先生、海外御出張の斎藤鎮男先生、また、御出席の筈が御入院のため欠席となった飯田宗一郎氏の御顔のみえないことは残念であったが、中川理事長に館長、専務理事も加わってなごやかな集いとなった。

セミナー・ハウスへの来訪は十五年振りの方、他の会合ではよく会っておられても、ハウスでは初顔合せとなった方々もある。その先生方の館内を歩かれての御一声に、「やっぱり、セミナーハウスはいいねえ」「ここは、ウン、現代の大学生、学生にとって貴重な所」、「もっともっと活用してもらおう必要を改めて感じるね」等々であった。

教師館の会議室で、中川理事長挨拶のあと予め用意された各種の資料に基づき、ハウスの活動の現状、更に今当面している幾多の問題点が提示され、続いてこれら現状を踏まえてどのように新しい活動や運営の展開が可能かについて、自由な意見の交換、討議が行われた。

そのあと、加藤先生からの御申し出に甘え、記念館の茶室で、加藤宗匠のお手前で、宇宙の再現であるというお茶を頂いた。「この泡の一つ一つが地球であり、太陽であり、無数の星々である……」と、微妙な茶筌の動きのあいだに語られる宗匠のその手さばき、動作の一つ一つに、心の表現である「形」を、そして茶の湯が茶道といわれる所以を改めて感じとったひとときであった。

会議のあとは、宇野重昭、鈴木皇両常

務理事も加わって夕食会、食事を共にしつつ、諸先生の口からポンポンとび出するいろいろな示唆は、「思いつきだがね……」と言われながらも、数々の実行に結びつけられる方向性が含まれており、「いくつ? ア、まだ若い」「バリバリやるんだね」の八十代の諸先生の激励に、「何か手伝えることがあれば、何でもいって……」のお言葉が添えられ、二十五年を経て老朽化した建物などと悩むより、その歴史と日々の活動の上にこれまでもつみ重ねられてきたハウスの生き方をこれからどのように積極的に活かしていくかを考えるための、有形無形の大きな示唆を頂いた一日となった。

FDプログラム小委員会編『大学教員研修マニュアル』二冊が揃う

日本の大学には、教育者としての大学教員のあり方を公の場で論じる伝統はほとんどなかった。が、今日、心ある教員の間には、教員の教授能力の向上に具体的に取り組む時期が来ているという認識が、少しずつではあるが生まれている。

FDプログラム小委員会が研修プログラムの開発とテキストの編集を手がけてきたのも、その現われである。

大学セミナー・ハウスは、この活動の中からすでに2冊のマニュアルを刊行しており、希望者には実費でお頒けしている(問い合わせ先Ⅱ企画室〇四二六・七六・八五三三)。

告(案)に関する件

収支決算については別掲の通りである。本年度を俯瞰すれば殊更に大きな事業というべきものは行なわれなかったが、開館30年に向けて実力を培養する時期であったといえよう。一つには専任の館長が就任されたこと、二つにはFDプログラムが2年目の事業として国立大学(今年度は東工大)の教育方法等改善経費によって運営され、当分の方式が活用される展望が開けたこと、三つには少ないとはいいながら、利用者延べ人員が五万五、六一一人と、これまでの最多を数えたことなど、地味ではあるが将来への布石が置かれた。

(1)「大学教員の魅力開発―FDプログラムの実践」(一九九〇年一月発行)

I. ファカルティ・ディベロップメントとは何か、II. 大学教授法の改善、III. カリキュラム開発、IV. 自己評価、の各項目にそれぞれ関連のある論文が転載されている、いわばFDの理論編、他に資料として「図表・日本の高等教育」、「自己評価項目」、参考文献など。(B5判二八〇頁)

(2)「よりよい大学教育の方法を求めて」(一九九一年三月発行)

大学教員懇談会企画委員やFDプログラム小委員などの「身内」の手になる問題提起の他に、関係者一名の座談会、ファカルティ・ディベロップメントに関する文庫目録(目次付き)などが収められている(B5判一〇四頁)。付録・文庫目録のデータベース(5インチFD)

千人会

91年3月～5月

◆現在会員一、四六三名(実会員数)

(通算入会者一、八三四名)

◆新しく会員となられた方々

- C 聖心女子専門学校 大野 澄子殿
- C 東京外国語大学助教 田島 信元殿
- A 東京大学 四年生 吉原 健吾殿
- C 恵泉女子学園短大講師 有馬 弥子殿
- B 東京工芸大学学長 田中 栄 殿

入会のところ

来年就職予定なので、従ってまだ学生ですが、いろいろお世話になったセミナー・ハウスに今後とも関わりたく、忘れぬうちにと志願しました。

東京大学法学部学生 吉原健吾

◆会費ありがとうございました。

- 五唐勝、梅村魁、中村妙子、柘植敏治、谷口汎郎、宮腰賢、高橋誠、寿里茂、藤木宏幸、一松信、示村悦二郎、松崎義徳、森田明、永野賢、今井清一、勝見允行、朝倉弘之、安藤英治、河田喬夫、平野鉄太郎、原芳男、小林文男、板垣雄三、増澤利幸、齋藤幸一郎、保坂栄一、佐久間章行、松尾弘、土井恵美子、牧内勝、市川邦彦、手島修蔵、絹川正吉、人見宏、荒川孝子、白川和雄、木村健一、岡村総吾、迫村純男、麻島昭一、桜井育子、島田治夫、小山五郎、高松正昭、森山ヨシ子、室本誠二、大西清、小原啓義、手塚喬介、福西基、原一雄、関口晃、尾田綾子、河村フジ子、池原義郎、大田未穂、熊坂敦子、柴田泰比古、有賀弘、木田宏、黒田陽子、蓮見音彦、寺内礼治郎、瀬部孝、池田義人、平澤薫、山田辰雄、春田素夫、茂木光子、一番ヶ瀬康子、秋間美、丸山眞男、井村君江、永井道雄、藤井弥太郎、小倉芳彦、村田晴夫、高瀬文志郎、向坊隆、佐藤慶幸、望月清司、市川孝正、碓井信一、大口勇次郎、村山松雄、松澤通生、小川正治、石弘光、古田勝久、加藤六美、井

平成2年度千人会会計収支計算書

(平成2年4月1日より平成3年3月31日まで) (単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
会費	3,936,000	印刷製本費	164,697
雑収入	554,641	通信運搬費	644,204
		弘達手数料	45,440
		学生指導セミナー補助	5,601,862
		国際学生セミナー補助	595,773
		雑費	412
当期収入合計(A)	4,490,641	当期支出合計(C)	7,052,388
前期繰越収支差額	12,976,924	当期収支差額(A)-(C)	△2,561,747
収入合計(B)	17,467,565	次期繰越収支差額(B)-(C)	10,415,177

雄一郎、井早康正、長谷川幸男、宮川彰、田桐郎、内田祥哉、藤井耕一、古畑和孝、竹内喜代司、朝野洋一 (敬称略)

◆千人会員からのたより

館長岡宏子先生のご麗筆に、ハウスの春を覚えました。また利用させていただきま

日本女子体育大学教授 河田喬夫

セミナー・ハウスのことを忘れていたわけではないのですが、日常の多忙に追われ失礼いたしました。ハウスに関わった一九六五年当時に比べて、大学も学生もすっかり様変わりしました。

あの頃がなつかしく、飯田先生の温顔が忘れられません。私も歳を取ったのかもしれない。広島大学総合科学部教授 小林文男

古稀の祝辞ありがとうございました。同時に上智大学を定年退職することになりました。引き続き研究を趣味とした生活を送ります。上智大学教授 市川邦彦

一年間の予定で、パークレーに研究に出ます。帰りましたら、またよろしくお願ひします。国際基督教大学教授 絹川正吉

春にはまた新しい志をもって、若人が丘を登って来られることでしょう。楽しみです。日本女子大学附属高校相談室 桜井育子

会員となつてかなり時間も経過しましたので、Bランクに昇格を願ひます。日本大学教授 室本誠二

大学セミナー・ハウス創設以来の千人会会員です。一層の発展を祈ります。東京教育大学名誉教授 平澤 薫

都立大学を停年退職し、四月から東京都が昨秋設立した生涯学習の機関「都民カレッジ」の主任教授を務めます。東京都立大学教授 秋間 実

「セミナー・ハウス91冬号」有難うございます。私も参加させて頂いた「国際学生セミナー」の記事を懐かしく読ませて頂きました。経営コンサルタント 小川正浩

私の古稀記念の画集「緑と水と山と風」をお送りします。東洋大学教授 井出 翁

私学教員三年生になるところで、戸惑いながらも元気でやっています。東北学院大学教授 渡利千波

長い間のご無沙汰お許し下さい。さかのぼって五年分の会費のつもりです。東京大学教授 後藤光一郎

本年三月をもって東京大学定年となり、四月より左記大学に勤務しております。茨城キリスト教大学教授 荒井 献

セミナー・ハウスの建物は、どの建物も絵になります。若者にとって人生のよき糧となるようなエネルギーの蓄積場として、これからも発展されることを祈ります。元職員、フレンズケアセンター室長 桐生富久

岡館長からカードをいただき、数年ぶりに支払わせていただくことを嬉しく思います。東京外国語大学教授 中嶋嶺雄

若葉雨 セミナーハウスも 間近くに「引越そば」二千元を加えました。東京立大学教授 児玉昭太郎

文教研の全国集會も40回を迎えます。19回から大学セミナー・ハウスとともに歩んで参りました。ことしもよろしく。国立音楽大学 荒川有史

幸いに本日八十歳の誕生日を迎えることができました。今後も元気で長生きできるものと思ひます。明治大学名誉教授 藤井耕一

還暦を迎えることができましたので、その記念に一万円献金させていただきます。東京大学教授 古畑和孝

業／務／通／信

'91年3・4・5月

花と新緑の丘の合宿研修から

●3月は春休み・学年末の多様な合宿

3月には、春休みを利用し、一つの学年を締めくくろうという定例の合宿が多い。東京工業大学システム・マネジメン卜・セミナーもその一つ。今春もすでに40〜50歳代になるOB諸氏が全国から参集、同セミナー育ての親である松田武彦氏（現産能大学長）との年に一度の再会を果たした。このほか、国際基督教大学三宅彰ゼミ、東京外国語大学中嶋嶺雄ゼミ、専修大学望月清司ゼミ、早稲田大学市川孝正ゼミ、そして東京大学比較文学・比較文化研究室などの常連グループが相次ぎ再来された。



50歳代までの幅広い年齢層の学生たち——明治学院大学第Ⅱ部社会科学部フレッシュマン・キャンプ——下掲の『わたしたちの合宿』参照。前列中央が筆者（'91.5.19）

大学連合の集会では恒例のフランス語強化合宿（7泊）があり、初利用では8大学（早稲田、東京、明治、東京理科、芝浦工業、工学院など）の建築学科の学生からなる自主研究グループ「建築林」があった。当ハウスの建築空間は彼らの討論に恰好の題材となった。

さらに、新年度を前に、留学前のオリエンテーションが3件（CICカナダ国際大学、PIEE国際教育交流協会、エイ・エフ・エス日本協会）、また新入社員の入社前研修も7件行なわれている。そして3月末日、90年度の業務が完了した。年間の宿泊利用者は延べ五万五六一一人（開館以来の最多）を数えた。この一年間の当施設のご利用とご支援に對して、この紙面を借りて感謝の意を表したい。



散策もプログラムの一つ——瑞々しい新緑の中の白梅学園短期大学保育科の新入生たち（教師館屋上）（'91.5.30）

わたしたちの合宿

世代をこえた生涯教育の場

——第二部社会科学部フレッシュマン・キャンプでの出会いと交流——

明治学院大学
第二部学生課長 熊坂勝雄

本学第二部社会科学部の新入生歓迎行事の一つであるフレッシュマン・キャンプを、今年もまた大学セミナー・ハウスで開催することができた。

第二部新一年生の定員は現在百名で、うち「一般入試」による者が約七割、「勤労者・社会人特別入試」による者が約三割である。後者は実社会で働きながら勉学を続けようとする人びとで、その仕事も人生経験もさまざまである。前者はむしろ高卒後すぐ入学する者であるから、学生の年齢の幅は18歳から50歳代までとなり、一人ひとりのおかれている境遇も極めて多様になる。高卒の新入生が隣席のクラスメートに話しかけようとして顔を見たとたん、自分の父母ほどの年輩者であるため、コトバを選びながら話す——そのような体験を通して、それまでに出逢ったことのないかた人間関係が創られていく。まさに生涯教育の場としての新しいクラスがそこに形成されてゆくのである。

このような経験をしながら夜間の大学生活にも馴れはじめた学生たちが、5月中旬、土・日曜を利用してフレッシュマン・キャンプに集う。「先生や友と語り合い、大学を理解する」

ことを目的に、全体会、分科会、レクリエーションを三本柱にプログラムが組まれる。パネルディスカッションのパネラーは教師二名、二年生一名、新入生二名（高卒者・社会人各一名）。テーマは「社会学とは何を学ぶ場か？」で、これも4月中に新入生全員が決める。同時に実行委員も選出され、準備に入る。以後、キャンプ当日の運営に当たるまで、高卒者・社会人双方の自主的な協同作業が続くのである。

十名前後の各分科会には教師と上級生が参加する。ここでも、職場における問題、仕事と大学生活の両立などさまざまな悩みも披露されて、討論は自然と現実味を帯びてくる。高卒者は社会人の勉学に対する情熱に触れて、大きな刺激を受けるのである。このこと自体、大学生としての、あるいは社会学を学ぶ者としての自覚を持つ上のも、よきオリエンテーションとなるであろう。真摯な討論の後、この丘の新緑の樹木の中で繰り広げられるゲームやオリエンティングも、文字どおり心身をリフレッシュさせる最高の時間となる。

週末の一泊二日ではあるが、大学のキャンパスでは味わうことのできない交流と理解を深めることができたのではないかと思う。そのことは、八王子の地の利もあるが、セミナー・ハウスの使いやすさ、宿舎やセミナー室、そしてその恵まれた自然を大切に運営しておられる職員の方々の心遣いに負うところが大きい。学生達の中から、早くも夏休みに八王子合宿の第二段を計画したいとの声がかれるのである。

（二人）であった。この2カ月のオリエンテーションの利用者としては過去最多であり、これは同期間の総宿泊者数の65%に当たる。

今季初めて実施されたのは、①立教大学フランス文学科②桜美林大学国際学部③東京外国語大学日本語学科④東京会計法律学園⑤東京学芸大学総合社会学システム教室の五グループであった。東京薬科

●4・5月は新入生合宿で活況

新入生のオリエンテーション合宿は、新年度4月の冒頭から7月中旬まで続くが、やはり4・5月がピークで、ほとんど連日のように学部または学科の大型合宿が繰り広げられる。クラス単位以上の規模の合宿は別表（14頁）のとおりで、計52件（29校）、宿泊参加者は延べ八、九八八人（うち教職員六九一人、上級生七

平成3年4月・5月
新入生オリエンテーション合宿実施状況

学校名・学科名	参加者数(人)		
●4月(25グループ)			
東京薬科大(新入生歓迎キャンプ)	*239		<135>
立教大・フランス文学科	102	(14)	<4>
桜美林大・国際学部	294	(15)	<20>
共栄学園短大・生活学科	270	(26)	
共栄学園短大・英語学科	199	(16)	<4>
東京純心短大・音楽、美術、英語学科	256	(27)	<11>
東京工芸大・建築学科	139	(18)	<6>
杏林大学・保健学部	*138	(9)	
日本女子大・社会福祉学科	97	(13)	
学習院大・学生相談所	35	(4)	<10>
東京都立大・機械工、精密機械工学科	94	(12)	<6>
東京コンピュータ専門学校	203	(15)	<1>
東京コンピュータ専門学校	201	(16)	<1>
東京学芸大・国際文化教育課程	119	(20)	<9>
東京職業訓練短期大学校・生産機械、制御機械、エネルギー機械学科	89	(13)	
東京都立商科短大・経営学科II部	132	(15)	<39>
東京都立医療技術短大・一般学科、専攻科	301	(44)	
中央大・教育学コース	55	(9)	<7>
東京学芸大・幼児教育学科	30	(5)	<3>
恵泉女学園大・人文学部	256	(34)	
十文字学園女子短大・家政専攻	270	(8)	<23>
慶応義塾大・国際センター(留学生)	86	(9)	<28>
東京都立大・数学科	66	(7)	<26>
立教大・ドイツ文学科	74	(9)	
武蔵工業大・電子通信工学科	224	(23)	<27>
●5月(27グループ)			
東京外国語大・日本語学科	50	(11)	
武蔵野外語専門学校	46	(7)	
東京会計法律学園	*115	(5)	
東京会計法律学園	*224	(7)	
津田塾大・国際関係学科	296	(25)	<6>
津田塾大・英文学科	259	(19)	<14>
東京学芸大・生物学教室	36	(4)	<5>
東京学芸大・化学教室	32	(3)	
東京学芸大・地学教室	31	(4)	<4>
東京学芸大・物理学教室	32	(3)	<2>
東京学芸大・理科教育学教室	14	(2)	<2>
東京都立商科短大・商学科II部	115	(10)	<18>
東京都立立川短大・家政、食物学科	152	(25)	<27>
東京都立商科短大・商学科	283	(21)	<45>
東京都立科学技術大・機械システム工学科	53	(8)	
東京学芸大・教育情報科学教室	46	(4)	<3>
東京学芸大・数学教室	116	(8)	<5>
明治学院大・第II部社会学科	104	(12)	<10>
東京会計法律学園	*255	(7)	
文教大学女子短大部・英語英文科	*278	(18)	
東京学芸大・文化財科学教室	24	(2)	<2>
東京学芸大・自然環境科学教室	58	(10)	<5>
東京都立大・化学科	92	(9)	<50>
東京都立大・物理学科	51	(8)	<6>
東京薬科大・薬学部	211	(2)	<6>
白梅学園短大・保育科	*278	(20)	
東京薬科大・薬学部	282	(2)	<7>
計 52グループ(29校)	7,502	(637)	<577>

(注) 参加者数の()内は教職員、< >内は上級生とともに内数。*は2泊、他は1泊、実施順。なお、参加者の延べ人数は、8,998(691)<712>である。

大学の新生歓迎キャンプと右記①②の三グループが、いずれも入学式前の合宿を実施した。新入生が文字どおり「フレッシュ」である間に行なうオリエンテーションの効果を意識する主催者側の意欲のほどがうかがえた。

●第二部(夜間)の新生合宿
明治学院大学社会学科と東京都立商科短期大学商・経営両学科が第二部(夜間)のオリエンテーションを毎年実施している。働きながら学ぶ人たちにとって、週末をさいての一泊二日の合宿は特別に貴重な体験であろう。日頃夜間の大学生活では十分得られない教師や学友との交流をその分深めようとする意欲が参加者全員からうかがえる。明治学院大学第二部社会学科が、フレッシュマン・キャンプを初めて当ハウスで実施したのは'87年。

以来、今春で連続5回の開催である。本号の『わたしたちの合宿』13頁では、学生達の相談相手ともなりながら終始裏方としてこの行事に係わられた第二部学生課長の熊坂勝雄氏から「第二部オリエンテーション合宿」の模様をご報告いただいた。

●ゴールデン・ウィーク、この丘では
「あらたふと青葉若葉の日の光(芭蕉)」——この丘の新緑の美しさは、連休の頃が最高。まさに黄金の輝きを見せる。今年はこの時期もゼミ、サークル、大学連合の研究集会、新入生合宿、教会の修養会など多彩なグループで賑わい、約10日間の宿泊利用者は延べ約二〇〇〇人を数えた。日本列島到るところの混雑を避け、多摩丘陵の自然の中の自己啓発の休日を選んだ人びとである。

山内小庭園の誕生

故山内恭彦先生は、開館記念セミナーを指導されて以来、高い学識を通じ当ハウスの教育プログラムの育ての親として多大の貢献をされた物理学者であった。千人会の発足に当たっては、飯田宗一郎専務理事(当時)の呼びかけにいち早く応え第一号会員となられたり、移築した多摩の民家を遠来荘と命名されるなど、当ハウスと先生との縁は深い。

このほど富貴子夫人より、先生が生前丹精された庭木をゆかりの方々にお分けしたいというお申し出があり、飯田名誉館長が橋渡しをされて、椿、姫こぶし等5株のご寄贈を受けた。

岡館長の見立てにより、本館から長期セミナー館・国際セミナー館方向へ別れる三角地帯が植栽場所選ばれ、5月29日、「山内小庭園」の誕生となった。



故山内恭彦先生宅から移植された木々('91.5.29)

利用状況

●11月2日利用
 ●11月3日利用
 *個人利用、日帰りを除く

3月(123グループ、延五、二二五人)

東京経済大学文化会リーダーズマン

中央大学学生会

法政大学聖書研究会

成蹊大学文化会リーダーズキャン

東京工業大学助教授 中野 文平

明治学院大学第二部英語会

東京工業大学助教授 坂本 一成

東京理科大学狩野・高橋ゼミ

駒沢大学助教授 寺中 良二

早稲田大学助教授 鈴木 重勝

東京学芸大学助教授 小町谷照彦

早稲田大学示村・内田研究室

横浜国立大学体育系サークル指導者

セミナー

慶応義塾大学英語会

東京大学助教授 馬場 康雄

お茶の水女子大学助教授 森田 明

東京学芸大学発達科学交流会

東京都立大学助教授 坂元 忠芳

中央大学通信教育課程中央法律研究

会千代田支部

東京学芸大学講師 投野由紀夫

法政大学助教授 水野 節夫

国際基督教大学助教授 三宅 彰

東京大学国際法勉強会

早稲田大学助教授 吉野 孝

中央大学助教授 長内 了

東京経済大学教職員組合教研部

東京外国語大学助教授 中嶋 嶺雄

明治学院大学E・S・Sスピーチセ

クション

東京大学比較文化研究センター

早稲田大学理工学部英語会

筑波大学講師 森 政稔

東京農工大学助教授 岩鹿 健吉

慶応義塾大学助教授 岩田 末廣

早稲田大学助教授 大槻 義彦

早稲田大学助教授 鈴木 恂

東京薬科大学新歓祭実行委員会

早稲田大学絵画会

駒沢大学助教授 関口 雅夫

早稲田大学助教授 塩田 勉

中央大学講師 木下 徳明

中央大学助教授 米田 康彦

駒沢大学助教授 瀬戸岡 紘

学習院大学シェイクスピア・ドラマ

ソサエティ

武蔵工業大学助教授 伊藤 泰郎

青山学院大学助教授 中澤 進一

東京都立大学助教授 大串 隆吉

立教大学助教授 上田 信

杉野女子短大部講師 堀江 伸

千葉大学助教授 佐藤 宗子

千葉大学助教授 工藤 秀明

中央大学助教授 木島 淑孝

千葉商科大学助教授 住谷 宏

早稲田大学助教授 市川 孝正

桜美林大学助教授 大庭 篤夫

東北大学工学部電気・情報系

東京YWC A専門学校社会福祉学科

横浜国立大学助教授 内藤 純郎

CICカナダ国際大学新入生オリエ

ンテーション*

独協大学助教授 近藤ヒカル

専修大学助教授 望月 清司

いわき明星大学硬式野球部

竹田いさみ

青山学院女子短期大学ハンドベルク

ワイヤ

専修大学助教授 竹林 代嘉

東京大学教育学部附属高等学校

佼成学園高等学校校数学研究同好会

東京学生問題研究会

建築林

心理学を楽しく学ぶ会

日本医療情報学会

現象学的社会学研究会

論文検討会

フランス語教育振興協会

国際経済研究会

「わたしたちの町田」小学校社会科

副読本編集委員会

日本機械学会モーター解析研究会

国立療養所東京病院附属看護学校

フリーメソジスト桜ヶ丘教会

原町田教会

東京多摩いのちの電話

日本福音教団復活イエスキリスト教会

慧星会談

朝日カルチャーセンター

心理科学研究会

文学教育研究者集団

エイ・エフ・エス日本協会

日本電気オートメーション

カルソニック*

三和銀行八王子支店

森ビル

ヒューマンライフセンター

山村硝子

リコー

日本電気

川崎電線

クレディセゾン

生活協同組合都民生協

伊勢丹グループセンター

日立製作所

中央スバル自動車*

田村電機物流センター

リテイル・インフォメーション・サ

ービス

タチエス

ロア

多摩市役所市史編さん室

沖電気工業*

昭和飛行機工業

システムインテグレート

東都生活協同組合

クラブス

4月(104グループ、延七、〇四五人)

法政大学助教授 神谷 健司

千葉大学助教授 武蔵 武彦

中央大学助教授 野崎 守英

中央大学学術連盟

日本大学助教授 古坂 良雄

東京薬科大学新入生歓迎キャン

明治大学助教授 西野 萬里

立教大学言語研究会

東京大学フランス文学科新入生オリ

エンターテインメント・キャン

筑波大学助教授 井田 哲雄

千葉大学助教授 森住 衛

東京学芸大学助教授 野沢 敏治

明治学院大学助教授 山田 有策

横浜国立大学歴史学科春期合宿

水谷 史男

東京純心女子短期大学音楽・美術・

英語科オリエンテーション

東京工業大学建築学科オリエンテ

ーション

東京工業大学助教授 川副 博司

明治大学助教授 後藤昭八郎

中央大学助教授* 中川洋一郎

横浜国立大学助教授 鳥居 伸好

中央大学講師 河野 博忠

青山学院大学助教授 大谷登士雄

杏林大学保健学部フレッシュマン・

セミナー

駒沢大学助教授 杉浦 智昭

明治大学助教授 小堀 巖

東京大学助教授 行方 昭夫

日本女子大学社会福祉学科新入生オ

リエンテーション

学習院大学学生相談所フレッシュマ

ンキャン

明治大学助教授 森 久

早稲田大学講師 深沢 実

中央大学加藤家族法ゼミ

東京都立大学機械工学・精密機械工

学科新入生ガイダンス

東京学芸大学国際文化教育課程新入

生合宿研修

成蹊大学助教授 宇野 重昭

日本大学助教授 小林 晃

東京都立商科短期大学経営学科II部

新入生オリエンテーション

慶応義塾大学助教授 奥出 直人

青山学院大学助教授 笹森 健

東京都立医療技術短期大学新入生オ

リエンテーションキャン

日本大学助教授 花田 和史

工学院大学助教授 赤松 泰輔

中央大学教育学コースオリエンテ

ーション合宿

東京学芸大学幼児教育学科新入生オ

リエンテーション

明治学院大学助教授 秋山 智久

慶応義塾大学国際センター新入留学

生オリエンテーションキャン

東京都立大学数学学科新入生オリエン

テーション

駒沢大学助教授 大久保治男

東京経済大学税理士受験会

杏林大学助教授 熊谷 文枝

立教大学ドイツ文学科集中演習I

武蔵工業大学電子通信工学科新入生

歓迎ゼミナー

独協大学助教授 渡辺 学

桜美林大学国際学部新入生オリエン

テーション・キャン

共栄学園短期大学生活学科一年次合

宿オリエンテーション

共栄学園短期大学英語学科一年次合

宿オリエンテーション

大月短期大学助教授 村越 洋子

東京コンピュータ専門学校新入生オ

リエンテーション*

東京職業訓練短期大学校機械系新入

生ゼミナー

神奈川大学助教授 堀野 定雄

恵泉女学院大学人文学部新入生フェ

ローシップ

十文字学園女子短期大学家政専攻新

入生交歓会

専修大学助教授 麻島 昭一

桜美林大学講師 布施 涛雄

日韓学生会

郡内研究会

筑波大学インターカレッジ・人間関

係ワークショップ・リユニオン

国際教育交流協会

雲柱社愛の園保育園

日本基督教団出版局

河合塾国際教育センター

日本レクリエーション協会

ルソール合奏団

からだごとば研究所

シャブラニール

野外塾

スパーアルプス

学究社

雪印物産

東芝設備機器

●第18回国際学生セミナー

主題：地球時代の生き方を求めて
——湾岸戦争の問いかけるもの——
期日：1991年10月25～27日（金～日）

◇シンポジウム

「90年代の世界像と日本の選択」（仮題）
法政大学法学部教授 鈴木佑司氏
東京大学教養学部助教授 山内昌之氏
東京大学東洋文化研究所助教授 田中明彦氏

◇セクション演習

- A. 国連と安全保障
国際基督教大学国際関係学科教授 功刀達朗氏
東京大学法学部教授 鴨 武彦氏
B. 地域紛争とエスニシティ——先進工業諸国の
文化的洞察の開発を求めて
明治学院大学国際学部教授 武者小路公秀氏
国立民族学博物館助教授 大塚和夫氏
C. 第三世界の軍事化と民主化
武蔵工業大学工学部教授 志鳥学修氏
放送大学教養学部助教授 高橋和夫氏
D. 「世界新秩序」とアメリカのディレンマ
一橋大学社会学部教授 油井大三郎氏
慶応義塾大学法学部助教授 添谷芳秀氏

●第156回大学共同セミナー

主題：世紀末、甦るアリス
期日：1991年11月15～17日（金～日）

◇ゲスト講演

- 1. 鏡と皮膚——芸術のメタファーとして——
国学院大学文学部助教授 谷川 渥氏
2. 20世紀末はキャロルの？
京都大学経済研究所助教授 浅田 彰氏

◇全体講義

記号の国のアリス
東京都立大学人文学部教授 高山 宏氏

◇セクション演習

- A. ルイス・キャロルと解剖学
成城大学芸芸学部助教授 富山太佳夫氏
B. “軽メタ”と“ヘヴィメタ”
——ノンセンスとリアリティ——
東京大学教養学部助教授 佐藤良明氏
C. 普遍言語をめぐる夢想者たち
明治大学法学部教授 西垣 通氏
D. アリスの食卓
——拒食症・ヒステリー・広所恐怖症
東京都立大学人文学部助教授 富島美子氏
E. スチームパンクSF,
または歴史改変小説の論理
慶応義塾大学文学部助教授 巽 孝之氏
F. ポストモダン別世界通信
文芸評論家 風間賢二氏

◇問い合わせ先＝企画室 ☎0426-76-8532 (直通)

- 地人書館
市光工業
カルソニック
酒井薬品
ウチダユニコム
安川電機製作所
ベルモント化粧品
石川島播磨重工業
中央スバル自動車
日電アネルバ
■5月(96グループ、延六、八三七人)
武蔵工業大学教授 広瀬 謙二
立教大学助教授 正田 康行
東京外国語大学日本語学科新人生オ
リエンテーション 秋山 三郎
東京農工大学教授 アイクスピア・ドラマ・
ンサイエティ 齊藤 孝
学習院大学電子計算機研究会 谷 正光
芝浦工業大学白門会 山口 和孝
中央大学助教授* 坂本孝治郎
駒沢大学助教授* 北岡 伸一
立教大学助教授 中江 幸雄
東京都立川短期大学家政・食物学
立教大学助教授 立教大学助教授
東京都立立川短期大学家政・食物学
法政大学第二部文化連盟会計学研究会
日本大学教授 北野 弘久
東京都立大学助教授 柳田 辰雄
津田塾大学国際関係学科フレッシユ
マン・キャンブ 高橋 清
芝浦工業大学教授 津田塾大学英文学科フレッシユマン
・キャンブ 大串 隆吉
東京都立大学助教授 東京学芸大学各教室新入生合宿研修
生物学教室
化学教室
地学教室
物理学教室
理科教育科学教室
教育情報科学教室
文化財科学教室
自然環境科学教室
東京都立商科短期大学商学科II部新
入生歓迎オリエンテーション
立教大学助教授 立教大学助教授
東京都立立川短期大学家政・食物学
科新入生歓迎セミナー
東京都立商科短期大学商学科新入生
歓迎オリエンテーション
国際基督教大学助手 奥野 昌宏
成蹊大学助教授 奥野 昌宏
早稲田大学教授 那須 壽
東京都立大学教授 小山 昇
東京都立科学技術大学機械システム
工学科新入生オリエンテーション
武蔵工業大学助教授 安田 忠郎
明治学院大学第二部社会科学フレッ
シユマン・キャンブ 下斗米伸夫
法政大学教授 下斗米伸夫
東京理科大学狩野・高橋ゼミ
東京理科大学教授 富澤 稔
早稲田大学システム科学研究所
文政大学女子短期大学部英語英文科
フレッシユマンセミナー
東京都立大学化学科新入生オリエン
テーション
東京都立大学物理学科新入生オリエン
テーション
一橋大学教授 平山 皓
東京薬科大学薬学部フレッシユマン
キャンブ*
白梅学園短期大学保育科新入生オリ
エンテーション
帝京大学米国学生夏期セミナー
武蔵野外語専門学校新入生歓迎オリ
エンテーション
東京会計法律学園新一年生就職セミ
ナー**
東京造形大学教授 星野 隆三
桜美林大学・短期大学体育文化団体
連合会
第17回国際学生セミナー編集委員会
現代社会科学研究会
山口ゼミナー
横浜指路教会
高橋聖書集会
日本聖公会横浜教区
日本フリーメソジスト教団
日本コトバの会
日本ハリストス正教会教団
運動学習研究会
からだとはが研究所
台湾学会
汲五書会

●編集後記

この7月1日から改正大学設置基
準が施行されたことに伴い、当ハッ
スを利用される先生方との会話の中
にも、何かとこのことが話題にのぼ
ります。
大学教員懇談会企画委員会が目下、
力を注いでいるのが、ファカルティ
・デイベロップメント(FD)をめぐ
る活動です。本紙第一二〇号、一二
二号でFDに関する大学教員の発言
を巻頭で紹介してきていますが、本
号では昨年10月、『大学教員研修
マニュアル』の編集のために行なっ
た座談会の中から、一部を抜粋して
掲載しました。大学教育改善への取
り組みは、大学教員自らの努力で、
という関係者らの良心が、大学社会
の中で受けとめられていくことを祈
りながら。
一方、周囲の自然環境も、表紙の
写真に見るように姿貌が著しく変
化しています。新緑に包まれた国際セ
ミナール館の後ろには、四月に移転
を完了した東京都立大学のキャンパ
スがのぞかれます。その手前は隣接
地に建設される老人ホームの工事現
場です。こうした中で職員たちは、
山カカシがカエルを呑み込んだ、カラ
スが電線に触れて感電死した、タヌ
キの駆けていく姿を見かけた、とい
った情報交換にも余念がありません(能)。